

句圖集

未踏白書

秋山踏

未踏白書 推奨

未踏君が退院後「南柯」に加盟。年毎にめきめきと特異のマスクと併せて進出しつゝある頃、一日、短篇小説の原稿を読んで欲しいと持って来た。内容は、両手の指が六本ある一女性の生きざまを綴ったものであった。異様の人物を描くにしては、文章のスタイルが適せぬと不可として返した。今それを思い返し、折角の未踏君の文学意識の芽を摘んでしまったと反省している。

その文学の芽が発展していたら、ジャーナリズムの一角に特殊の立場を主張し発展をし続けていた事と思う。

「未踏白書」は俳画と自選俳句三百句と、俳句を中心とするエッセイとの三部作となっている。最新作の「形に係わること」は見えないものを見る。卓越した叡智ある一文と首肯した。

未踏の俳画と俳句と書は三昧一体、独特のものである。ジャンルは異なるが、中国陽州八怪の随一人、金冬心（金農）と通うものがある。本朝に於ては、碧梧桐と比肩し得る。その書を見て、すぐ作者がわかるとは大変な事である。碧梧桐は泰山に登り、六朝体に接し、これだと、自分の書体を確立した。未踏は生来的なるままに独自の書体が生成した。

それは昨夏、瀬田パークアベニューでの処女俳画展によって実証。更に鳥取市民会館での個展でも喝采を得た。琉美洞の星野氏が名伯楽として、福岡、千葉と全国的にその波を押し拡げてゆく。

日本俳壇に秋山未踏、在りとの大合唱が遠からず、津々浦々に辺満するを確心し宣言する。

昭和五十七年七月

於 南柯書屋 百鍊 平 田 拾 穂 識

目次

未踏白書 推奨	1
平田拾穂	
未踏白書によせて	4
句画集	7
未踏いろは歌留多	81
随想	97
質屋春秋	99
父の最後	107
飯に係わること	113
形に係わること	119
未踏三百句	125
あとがき	157
未踏略歴	159

未踏白書によせて

描くこと

従来、俳画は洒脱なものとされ、如何に少ない線で物が描けるかといった風なもので、いずれを見ても同じ匂いがする。此の様な臭味に、私は我慢の出来ぬ拒否反応が起る。洒脱とは、俗気のない、さっぱりしている事なのだ。巷間の俳画は、一見、洒脱に見えるが、実状は、それらしく見せる事に腐心しているのではないか。その腐心が私に俗気を強く感じさせる。筆の運び、墨の付け方、揚句は、白菜の葉はこの様にと、方程式で絵が描かれている様な気がする。私は絵も字も習った事はない。勝手に描いているから出鱈目だ。然し、私はあくまでもこの出鱈目を真面目に守る。

書くこと

現今、書家の書は立派である。形も好く、配置も好い。墨の色にも細心の配慮がある。然し、私はこれらの書に、空虚なものを感じる。それは、表出された書の内容が、その書家の言葉ではないからだ。他人の詩歌、律句を文字で書いたに過ぎないからである。

自分の内面に、他人に伝えたい事が起り、それが言葉となり、その言葉を運ぶ媒体として文字が必要になったのである。文字は自分の思いなり、考えなりを人に伝達する手段である。文字で書かれた内容は、自分の心でなければならないと思う。他人の言葉の文字の羅列は、単なる書物（本）の類で、形の好い活字に過ぎない。

現代の書家は、他人の言葉を借りなければ、物が言えぬ程に己れの言葉を持たぬから、形骸にのみ執着するのか。

此処に見識の低さを見る。中国の文人は、自分の詩を、自分の字で書いた。「腹が減った」でもよい。本当の自分の言葉を文字にしてこそ、その書家の書と言えるのではないだろうか。

私は、私の中で結晶した言葉を、私の心で書き、描く。集録された作品は、大いに拙く、不満である。然し、紛れもなく此れが今の、確かな私である。

俳句のこと

自分の音程を、正しいと思っている音痴は、殊更に歌が好きで、よく歌い、愛嬌がある。今の俳壇は、数多の音痴が、お互いに誉めあい、慰めあって、和んでいるのに似ている。自分達の尺度で満足し、恥かしがらない。

芸術する者にとって、自負と、はにかみと、齒痒さこそが、創作の原動力になるのではなからうか。

知識の量が詩人の条件ではない。詩に対する心の高さ、深さ、の質が問題で、好い詩を作るには日々の心を研がなければならぬ。

詩（俳句）を作る人は大変多い。だが詩人は極めて少ない。

着ぶくれて切れば血の出る句を捜す

昭和五十七年七月

秋山未踏

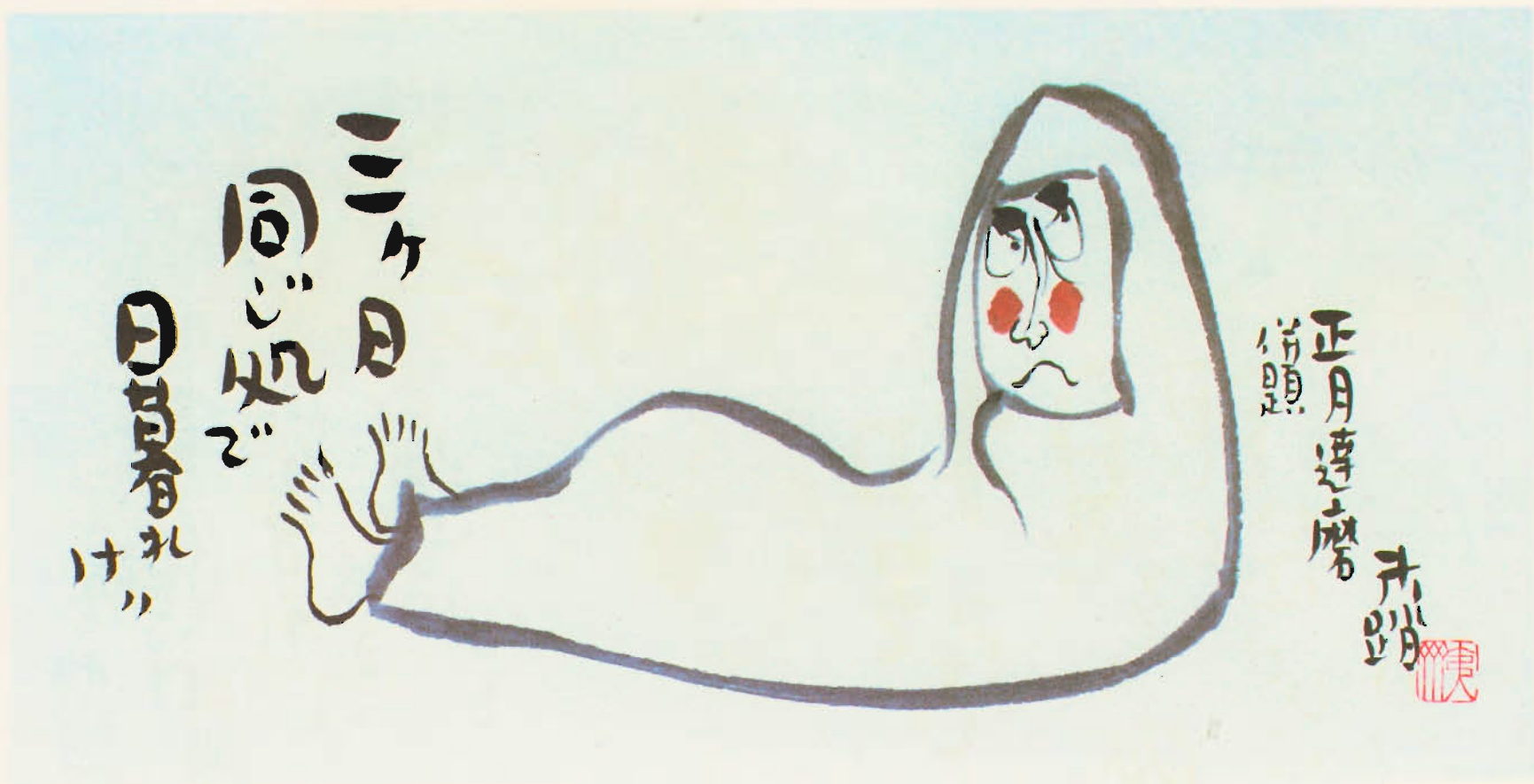
句画集

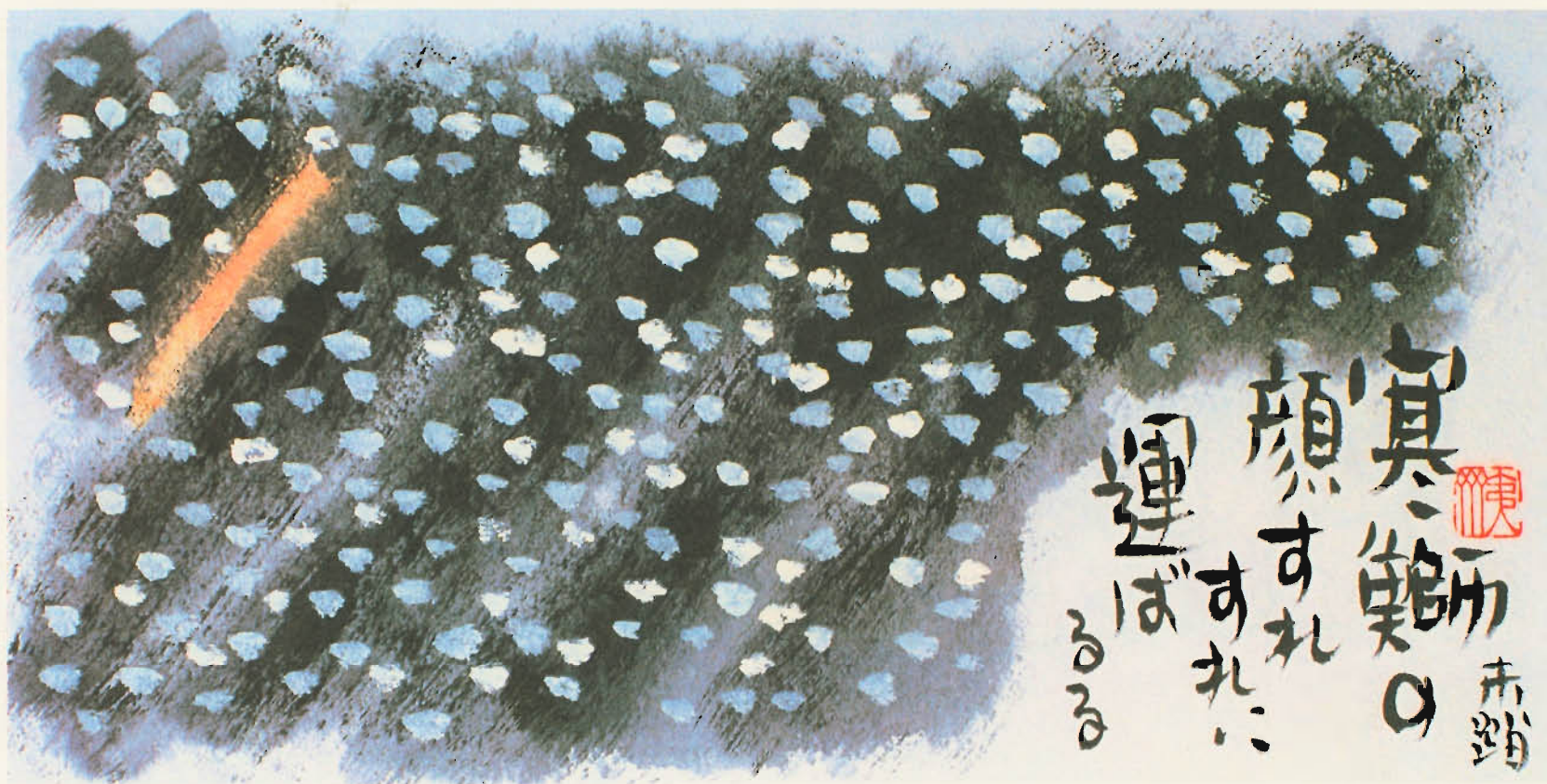




井
鎖











少大豆

赤
踏



同様に

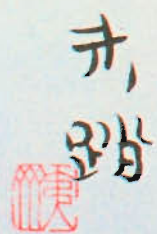
選んで
喰ふ

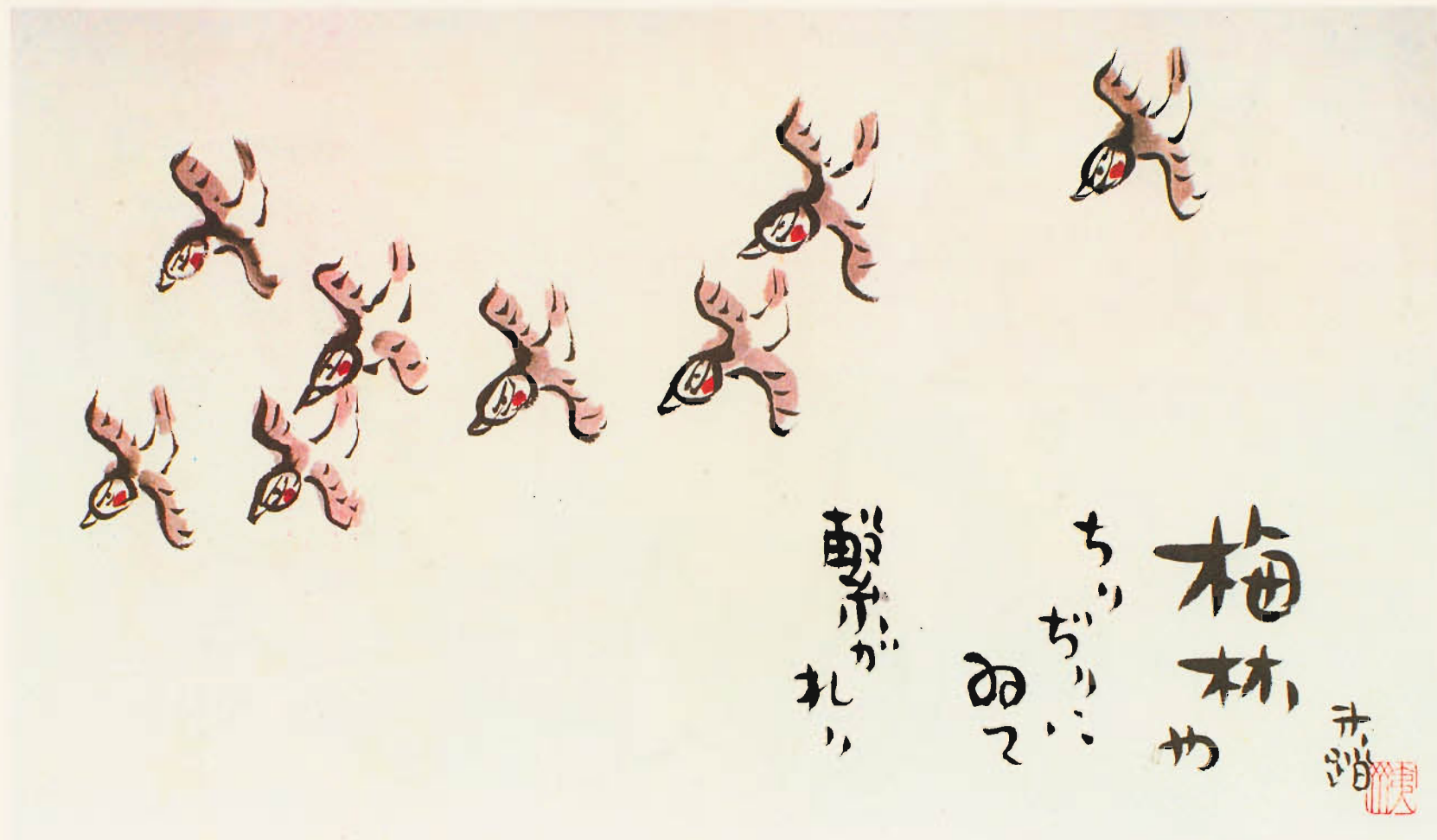
春日
浅き
花屋の



主人
外へ

を
少



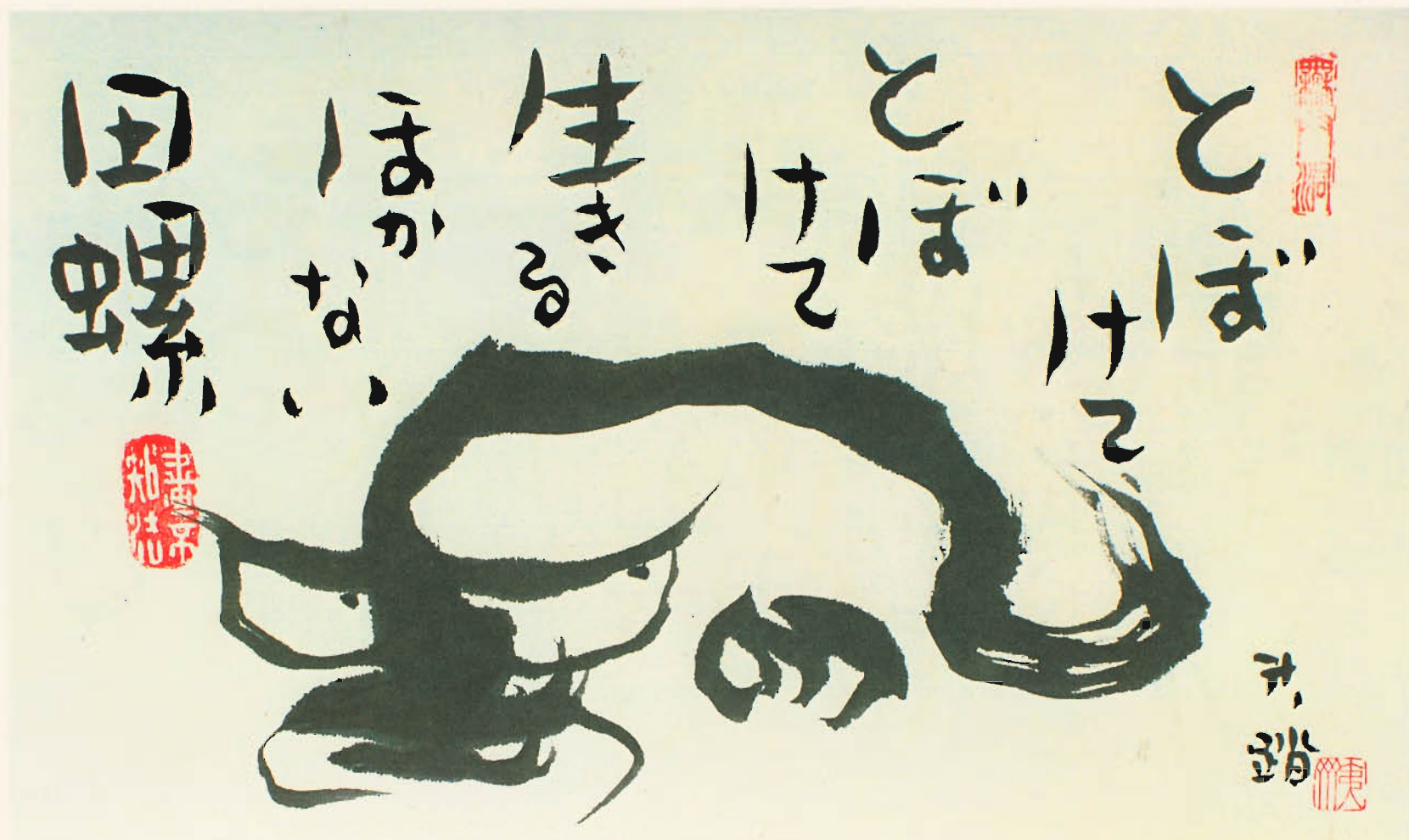


奴
の
は
ひ
か
き
し
なら
ぬ



二月
尽

未
踏
印





眼の前で

蒲公英の

如系

着地せり

赤路



西行己心
己れを睨み
生きつげり



不精不動明王
并題
升、道







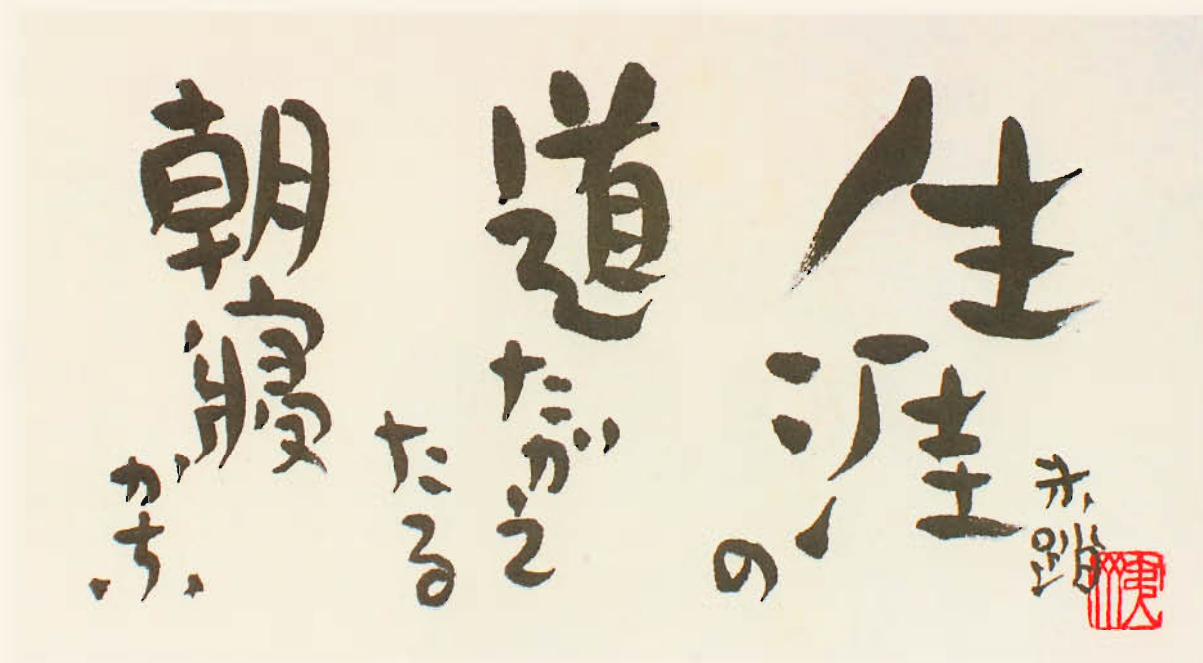

雲中ハ
春日の夕焼

たまをり

赤岩







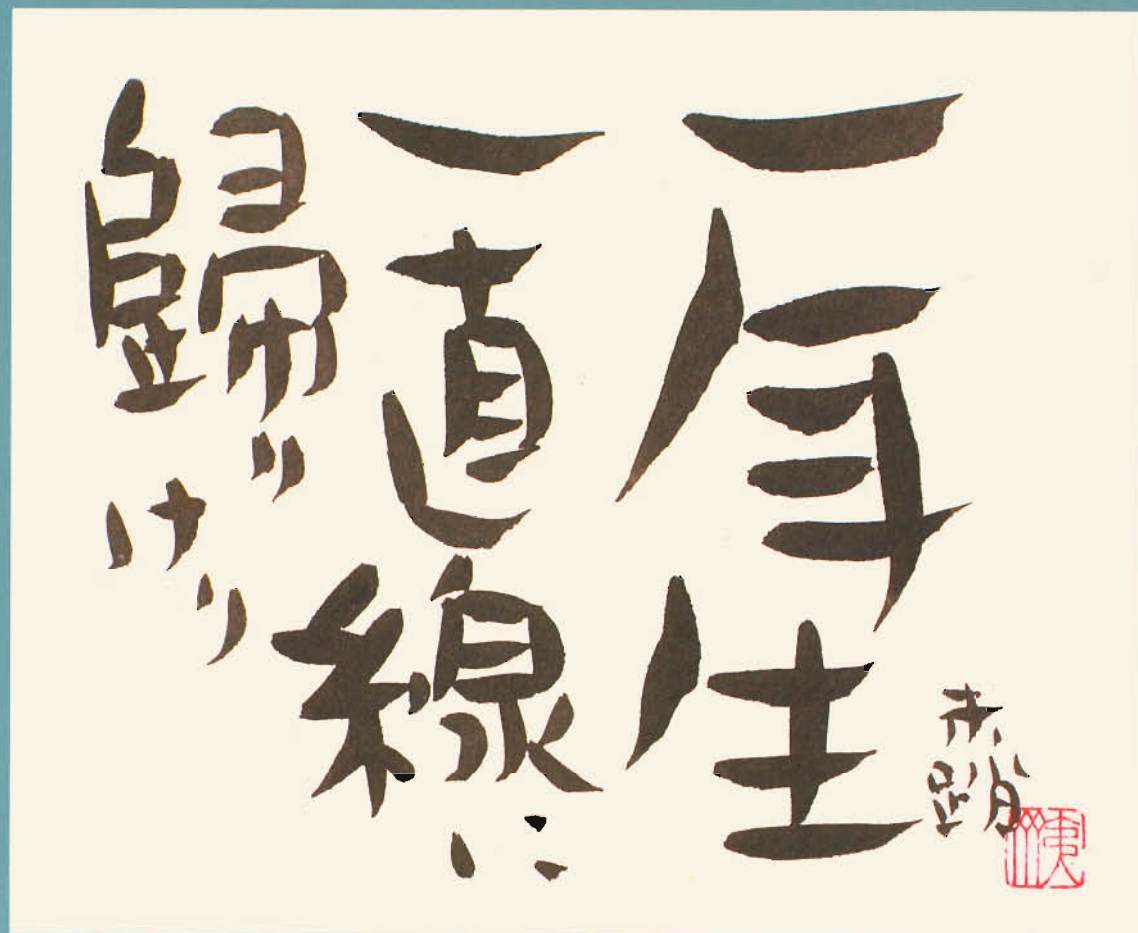


あるき、
なにかも
電車
の
電車
生
年

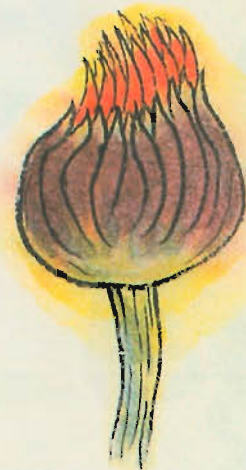
赤
踏
印







ほとけ
山河の
を



新井
蟻我
か

井
蛸


桃花
墨出来
あがり



百
挺の

千
石
印

日没
閉門す



牡丹
まだ見ざる



未踏



主月窟

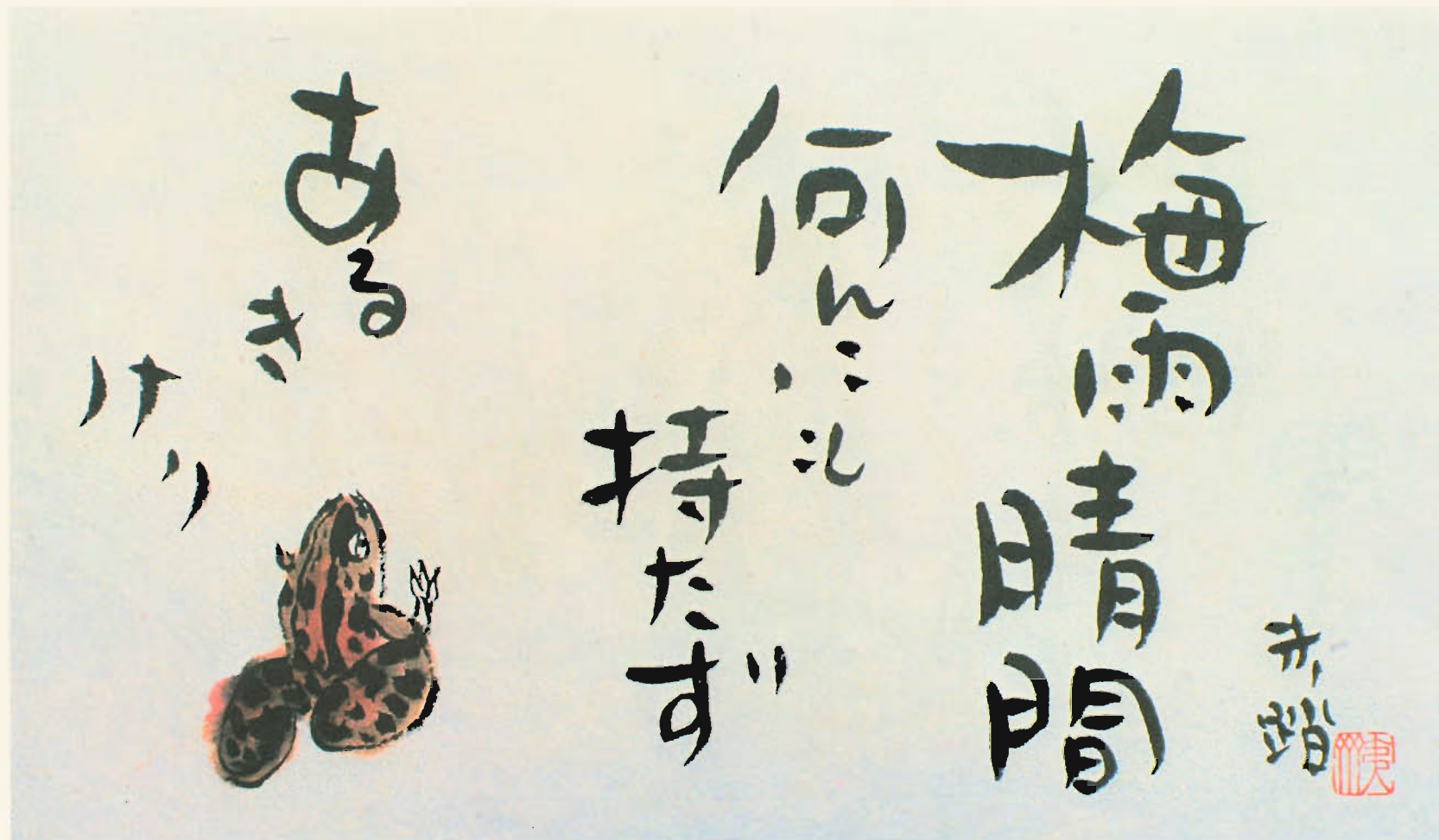
子
月
窟
印



一部屋の
灯を
消しぬ







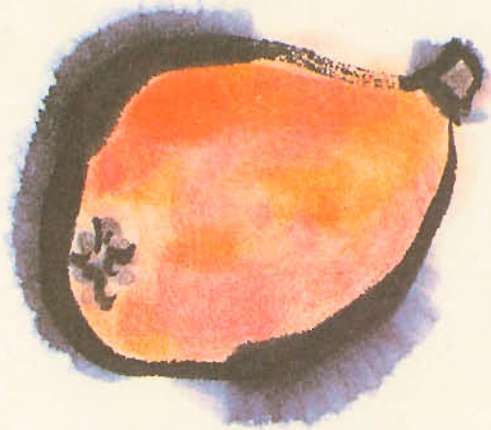




出され
け



浴衣



まだ
水も
溜らぬ



下
に
た
な
け



人
の
か
な
き
動

市
踏
印

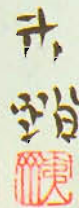




翔び
水突く
鳥か
深し
なから
赤



七月
やいもの
乞食 見当らぬ
市 鎖



日頃、特別には関心を払はなかつた絵でも、長い間掛けてあつた額を、急に外すと、その壁面は、穴があいた様に、落着かぬものだ。

将来、若し、私が乞食をする事があれば、その巷の景色と同化するまで、一と処に、坐り続け様と思ふ。其所に一日でも居なかつたら、私を案じて呉れる人が出来るかも知れない。







かなづの
ハッ



サ
落ち
け

夢中
居
升
消



ノミの

大工

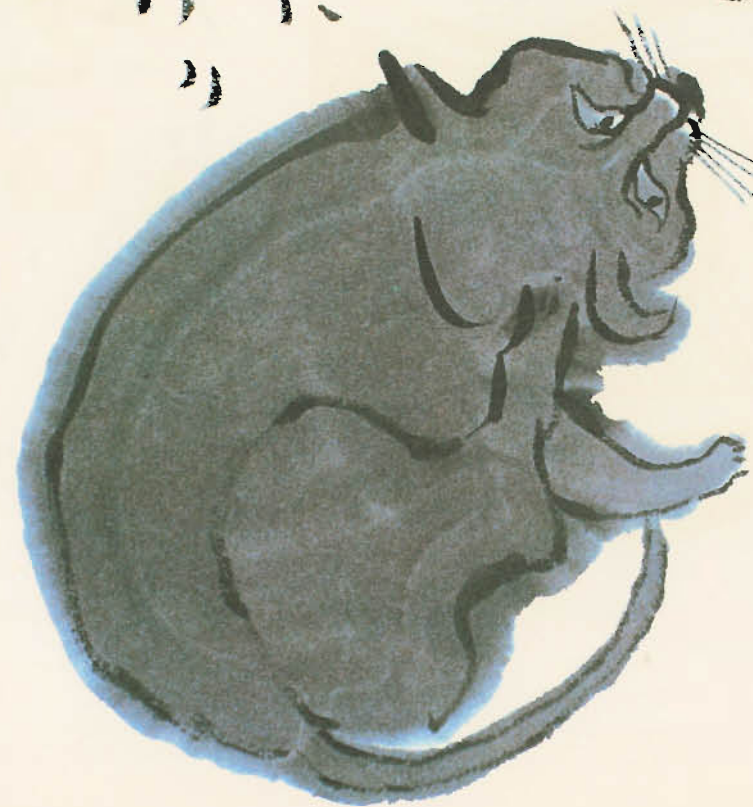
道

から

酔

ひ

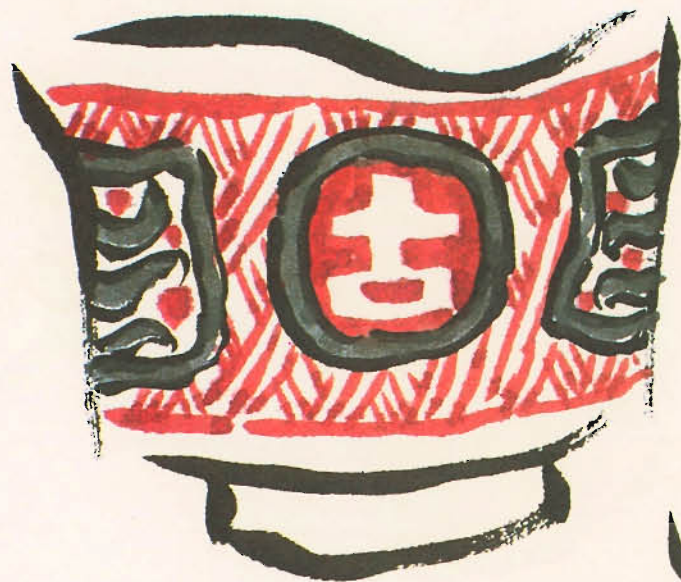
けり



赤
踏
印



ひぐらしの
その
ひぐらしの



く
れが
すの

於無明洞

赤
踏



机も
雨らし
西瓜喰ふ



子
子
子

旅人









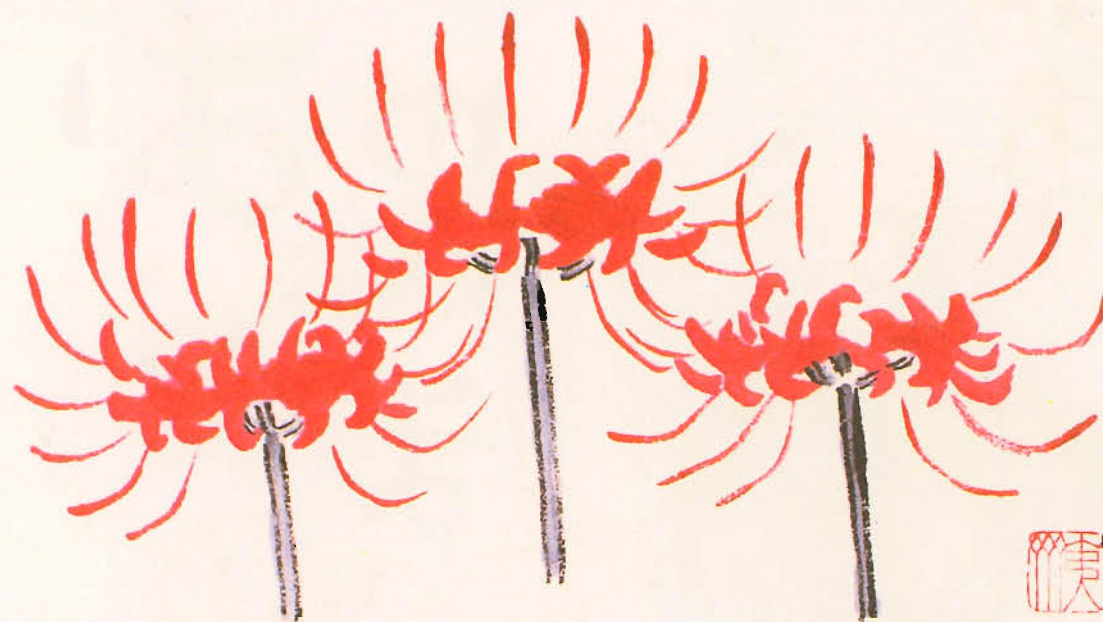
甘くも食ふ
視線のあひて
笑ひけり

於無明洞

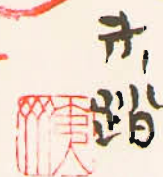
升
鑑





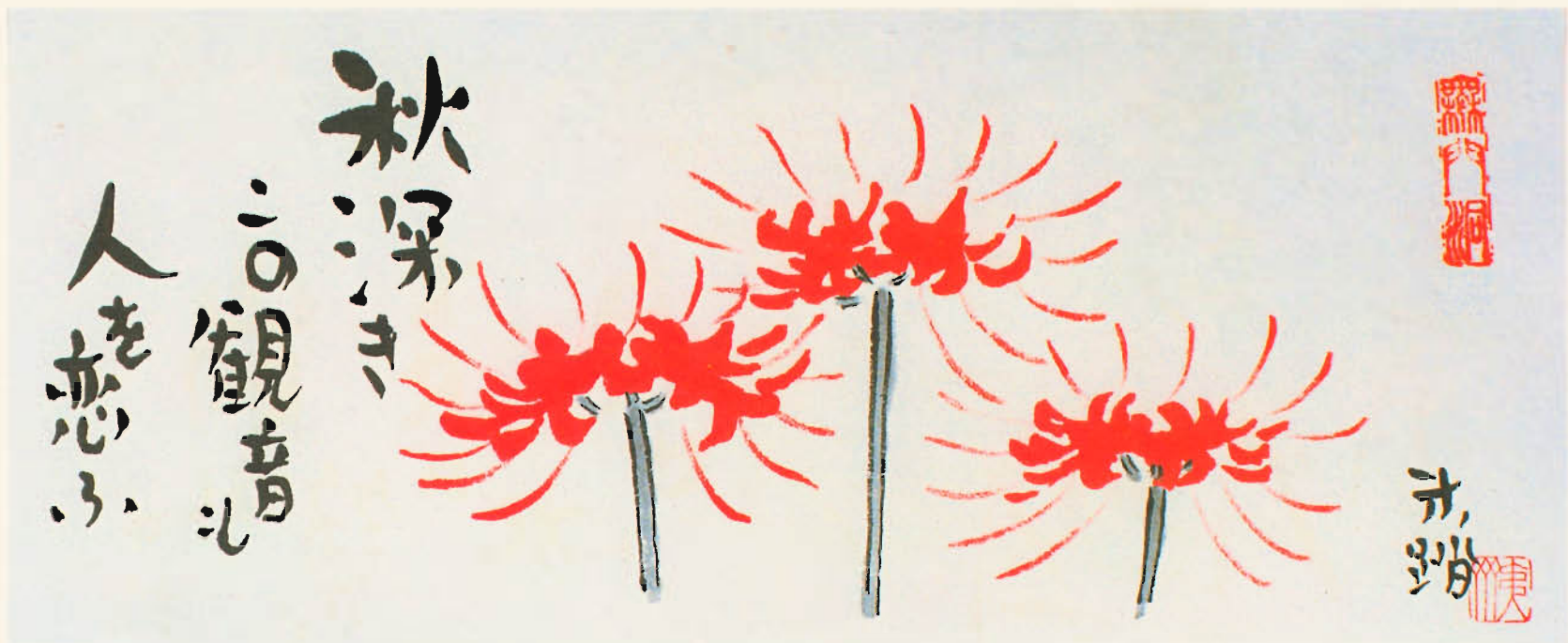


大佛の
秋の腹中
梯子あり



明月御覽
老ひこ
けり
の
赤
踏









ある方へ
限なく
帰る
し

井ノ口
印









女房と

ちつと
いそ
ぬる



小春
かち

未踏







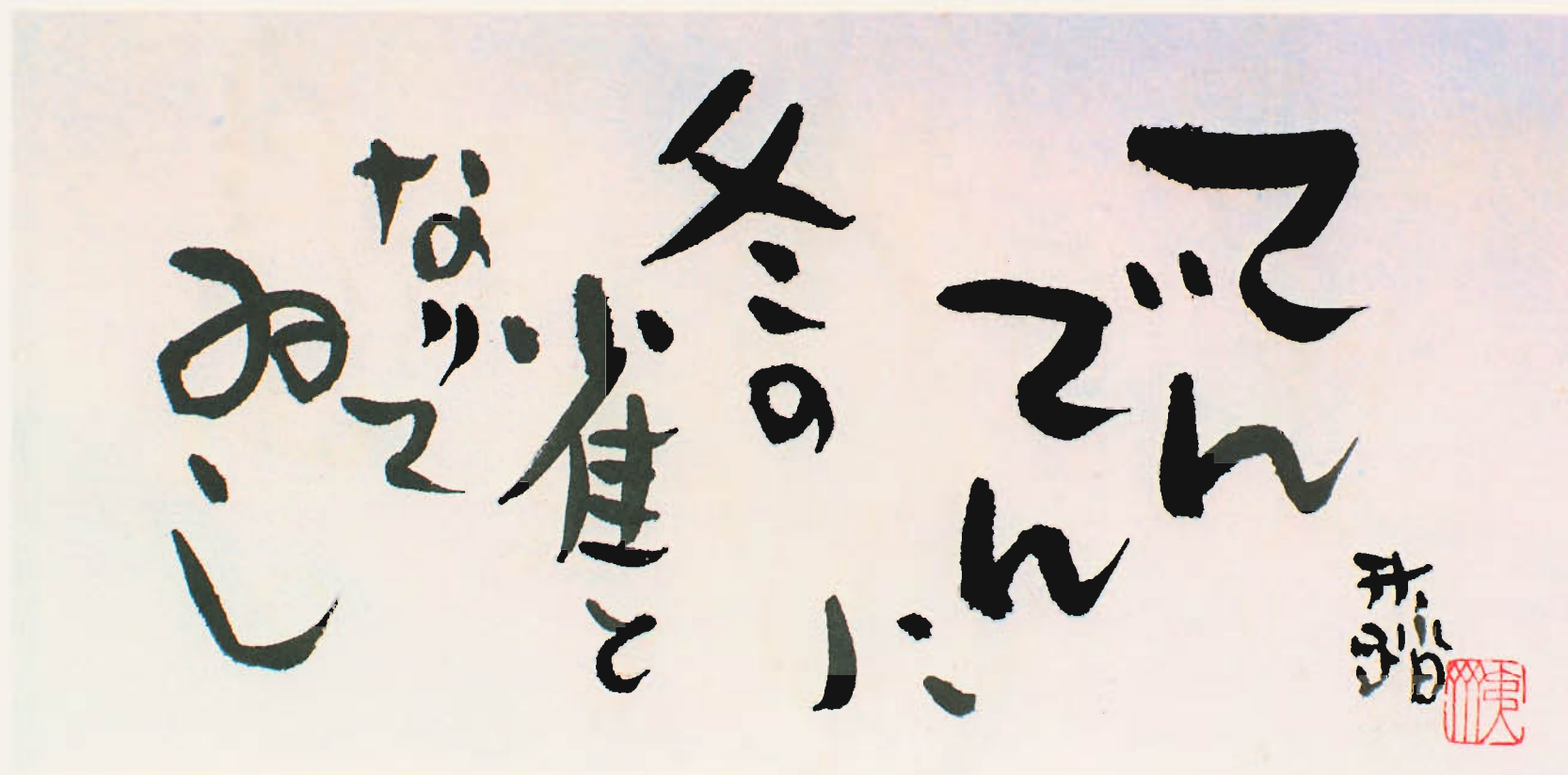
月山の
右へ
右へ
と



雪
降れ

元
日





壁
際
あ
る



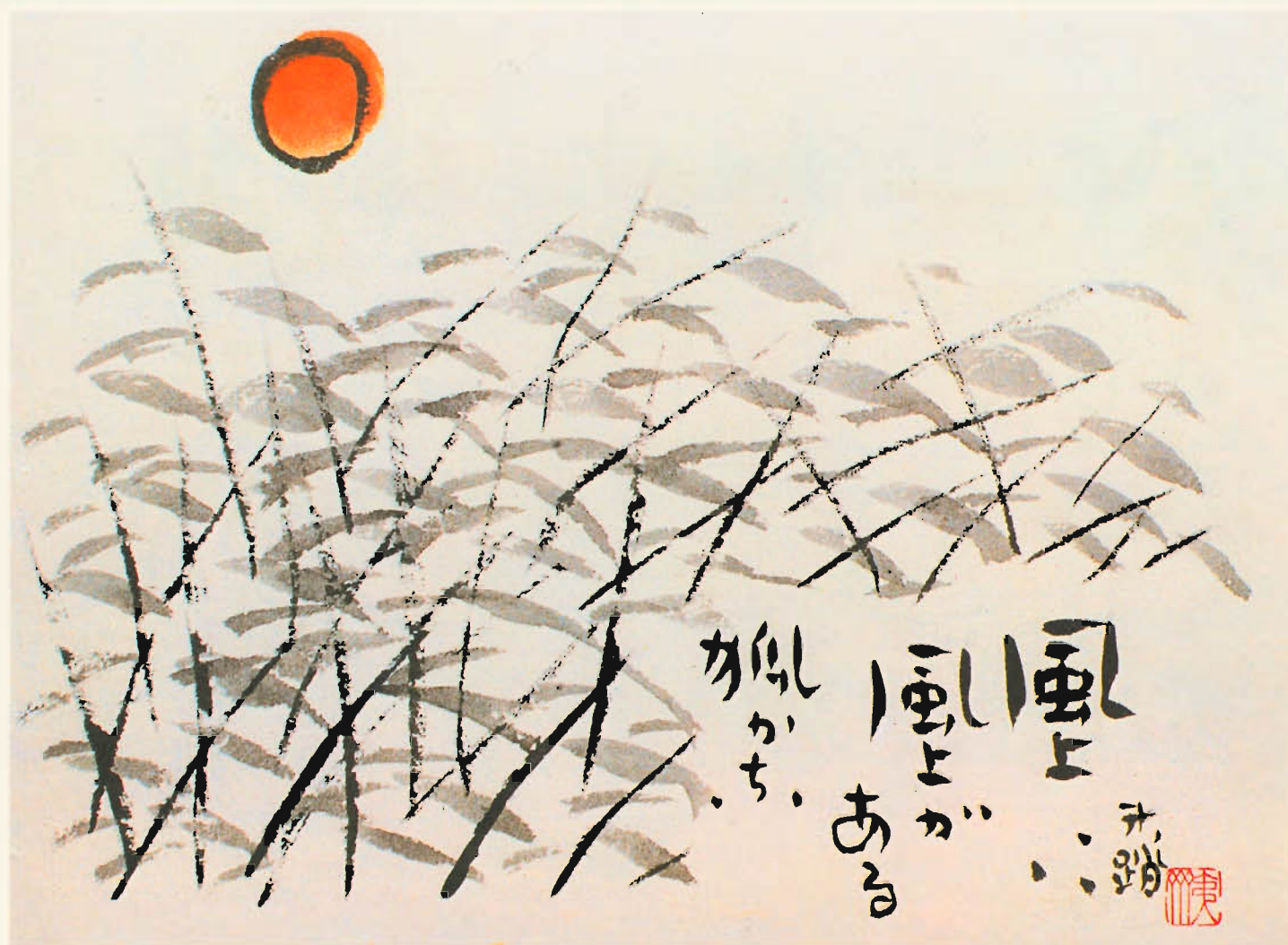
冬
夜
か



升
踏



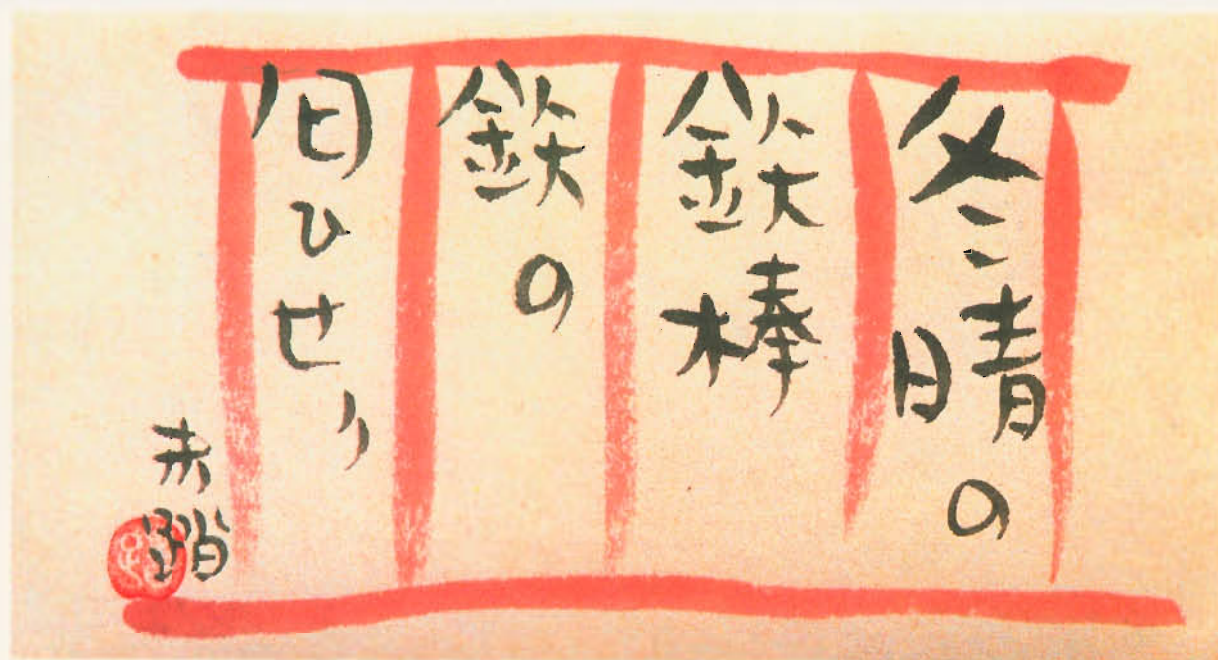
















終日
を
一冬
蠅と
付き
合ひ
ぬ



於無門洞

升
歩
東

赤踏

いろは歌留多



い

山あまた
従ふ山の眠りけり

ろ

呂山人の
ぐい香並ぶ桃の花

は

春の夜の
文楽人形泣き
崩れ

に

女房の
さらつとながし
ハッ頭

ほ

千鯨

目のあるちみなりぬ

へ

下手糺に

独り生きる夜の梨

と

毒母の

姿正しく生えにけり

ち

血を執りて

誰の渡ること

リ

流氷も
足踏ん張つて
見てぬたり

ぬ

沼より
蜻蛉の翅光りも

る

田舎々々
山育ちを、冬、海

を

田舎なれど
川上目指しけり

わ

吾冥く
駅の鏡に映りを

か

寒鯉の
水動がさず動きけり

よ

夜はまだ
終りとならぬせかち

た

瀧音の中へ
瀧の落ちゆけり

ね

菊心坊主
俺も俺もと並びけり

つ

梅雨晴間
何んにも持たず
あるまじけり

そ

そろそろと
心固めの花の
なが

れ

連翹
この屋根に二たせき

な

なげなの
沙漠の力を釣りにけり

ら

雷鳴の
まより雨の降るにけり

む

虫子の
まず甲冑を
崩しけり

不随五郎



う

空蟬のまだ、
木の肌を撫みを、

お

井戸茶碗
掌中の秋深めけ、

の

野分来る
曇りを見せし
漆椀

お

あらおこし
雪の中から日が出る

く

山崩れ竹葉
方尺の水白とせ

や

山一持ちたる鳥の
寒椿

ま

まだ熱き卵をこね
花辛夷

け

月光の中は
満月ありけり

ふ

鳥の体のなか
月夜かす

こ

金輪際
働く蟻を見て
疲る

え

駅も出て
春夕焼に手繰られし

て

ていつい
夕の雀となりてぬし

あ

鮎の
切られ
無_なぬ

さ

残_の米_や
固まつて人_を榊_みた_がる

き

桐_の花_は
一族に運_は偏_なす

ゆ

雪_がり_に泊_まる
實_は家_を飽_きに_けり

め

面体をもそのまゝに
大泳ぎ出す

み

暮虫の目鼻
みづから封じけ

し

春蘭の
どこしも動かぬ
日だらけ

ゑ

円空の
佛頭怒髪暖かし

ひ

人なづて灯の中におる
春愁ひ

も

桃の花
其処から
山は立ちあがる

せ

雪原をちぎれし
鶴は空に入る

す

すい先の龍となる
水 ゆくらす

ん

んすんとなご
大根も持たざるる

於無明洞
壬戌五月
寫之

秋山赤野





老

猪



俳句を蕊として

物を言う

質屋春秋



長い間、質屋と友好的な関係を続け、延々と金利を払ったという某写真家の所業が、質屋組合の認める所となり、その組合から表彰されたという話を聞いた。

その、動物生態専門の、ヒューマンな写真家は、接写の仕事の時には、望遠レンズを入質するといった具合に、仕事に応じ、写真機、レンズを入れたり出したり、誠にこまめに、しつくりした関係を保ったという。

表彰される位だから、その写真家は、質屋を訪れる度に、にこやかにお互いの挨拶を交し、ほどほどに遅滞なく金品の受渡しを行い、さぞかし和やかな質屋との付合であつたろうと想像される。

さて、此の位の事で世間が感心してもらっては困る。

私は、大学に入った昭和十六年に、風呂銭に窮し、母から送って来た純綿のパンツ二枚を質屋に入れた金で、三軒先の銭湯に、数人の友達で行った。それを皮切りに、質屋とは親戚以上の絆で今日に至っているのである。

尤も、質屋に行くのは、極端に金が無い場合に限っているので、自慢にもならないが、極限状態の、真剣且つ真面目な行為だけに、浅間しくも、ユーモラスで、自分の事ながら妙に懐しく、鮮明に記憶しているのである。此の長い、深い経験から、質屋に関する考察を開陳する。

質考初章は、質に入れる時よりも、受け出す時の方が気遅れする、という事である。此の心理を分析すると、質屋の「のれん」を潜る時は、人眼こそ少々気になるが、金が欲しい一心の、非常事態であるから、恥かしい等と可愛い事を言つては居られぬのである。然し、受け出した質草を抱えて門を出る時は、やっと金が出来て、只今出しました、という格好が自覚され、質を出した残りの金が幾ばくか懐にあるという心の余裕みたいなものが、自らを恥かしがらせるのである。

貧すれば~~純~~^金す。衣食足つて札節を知る。とは、いやはや全くの至言である。

又、此の関係を物理的に解釈すると、入質の時は、門を潜る事によつて、表通りの人眼から、一瞬にして自分が消えるのである、処が、受け出す時は、質草を抱えて門を出た途端に、表の人通りに己れを晒すのであるから、相当の距離を歩くまでは、人眼が後から付いて来る様で、ぼんの渥と背中がぞくぞくと熱いのである。

質屋出て眩しき春泥に足入れる

学徒動員の年、一切合財入質し、布団も無くなり、夏の内は良かったが、そろそろ冬が近づくにつれ、寒くて寝られなくなった友人がいた。

「おい、新聞紙をちぎつて、押入れの下の段一杯にし、その中にもぐつて寝ると温たかいぞ」と皆に吹聴していたが、そいつが私に言つた。

「だけどな、新聞が鼻の穴にひつかかつて、息する度に、シーシーいうて煩い」

此には後日談がある。或る日、そいつが下宿に帰ると、部屋の中の新聞屑の中にお袋が坐り、後向きに泣いていたそうだ。学徒動員が発表され、徴兵を案じた母親は、突然上京した。何もない息子の

部屋を訝かり、押入れを開けると、どっと小紙片が流出したのに仰天し、泣き出したという。

えらくとつちめられたらしいが、そこは母親のこと、質屋から全部出してくれた。当日は、まるで質屋の引越の様だったと聞いている。斯くして、一旦は原状に復した部屋も、十二月の動員時には、そっくり質屋に戻し、空っぽの部屋から、大変さっぱりと入隊して行った。そいつの名は、今、校友会名簿の、戦死者覧に、海軍予備学生、特攻隊として敵艦に突入、沖繩で戦死、二階級特進、海軍大尉。と記されている。

春光や死ねば死んだで仕方なし

戦後の焼跡に、ばたばたと闇市が建ち、軒続きのバラック小屋に、ハモニカ横丁等と、うまい名がいつの間にかついた。皆、呆けた様でいながらも、一億総闇屋の態で、何やら手帖に書きつけては、せかせかと歩き廻った。その頃、品物の薄い乾物屋の斜め前に、割としっかりした骨構えの物が建ち始め、初夏の或る日、新しい看板が下った。

「質叶屋」とある。

古道具屋で千円で買ったラジオを質草に、叶屋で千円借りた時は、何とも儲かった様な気がして、心が浮き浮きした。よく考えると、それ程嬉しい事ではなくインフレが急速に進んでいたのである。

叶屋に這入ると、上流家庭の婦人風の人が、金を借りる理由を、くどくどしているのに出合った。恐らく質屋は初めてなのだろう。親戚で金の都合をしてもらう時の様に、何故金が必要か、何に使うのか、質屋に事情を説明しても所詮は無駄である。要は、質草がどれだけに踏めるかが問題なのである。

又、叶屋で、こんな事があった。何かをまげて（質に入れる事を隠語で「まげる」と言う）所要の金を借りたら、店内の硝子棚に質

流れの売物のライターがあった。借りた金の一部で其のライターを買ったが、その翌日、そのライターを、同じ質屋に入れた事がある。幾分値好く貸して呉れたが、何だか変な気がした。

燕 突然質屋開店す

昭和三十年、戦後は終らんとしており、神武景気とかの好調な世の中だった。肺の一部を切除され、一年十ヶ月振りに娑婆に出た私は、仕事もせず、唯、裸になって画を描き、句を作る毎日であった。唯一の歳時記を、何度も古本屋に売り、その都度買い戻した。

その翌年、多少まとまった金が懐に這入ったので、仕事をするには馬子にも衣裳と、背広を七、八着作った。当時家庭には珍らしかったテレビも備えた。早天に慈雨の様な金なので、遊び呆けている内に、すぐ底をついた。当時は女房もなく、独り暮しだったので、熊本生れの、やくざになりそこねた半端な男を居候に置いていた。そんな或る日、麻雀の誘いがあった。懐が薄くては勝負は負けと、テレビを入質して軍資金に当てる可く、居候に担がせてやると、十万円で買ったテレビが、五万円になった。勇躍出かけた麻雀で一万八千円程勝った。友人が「午前一時では半端だから、昔の女の所に遊びに行こう」と誘うので、その気になり、翌日の午後まで付合った揚句、勝った一万八千はおろか、元金の五万円まで融けてしまった始末で、くたくたになって帰るなり泥の様に寝た。目が醒めると、例の居候が坐っていて、金が無いと言う。いくら自分の金でも、昨日の今日で素寒貧というのも面目ないので、「も一度行ってこい」と時期はずれの背広を質屋に持たせたら、一万円持って帰って来た。テレビと同じ位の、否それより高い位で作った背広が、一着五千円にしかまがらないのが不思議だったが、疲れているので、どうでもよかった。居候は、肉など買って来て、油で炒めると、「頂きます」等言って律気に正座し、飯を食い出した。心中背広を喰っていると

思い、肅然としたのだろう。私は風呂あがりの体をころがして、こんな計算をしていた。「同じ値段のテレビと背広が、片方五万円、片方五千円か、これからは有事に備え、テレビを沢山買い、背広を観てみよう」何か間尺に合わない気がした。



昭和三十三年、女房が出来たので、独りの時程は野放図でなくなった。然し本質は変らなかつた様だ。

中村寒三郎さんという、梨園の名跡と紛らわしい名前の方と知り合つた。海軍経理学校を銀時計で卒業した秀才であり、責任感が強すぎて、会社法人の負債を、専務だという事で、個人で背負い、自宅を提供して返済にあてた。結果として、住む家がなくなつたのである。当時、一男二女の子供さんが居り、上の二人は杉並の西高で、一人は中学生、三人とも成績抜群。医者になるんだと、頑張っていた。中村さんは、会社が倒産したり、家をとられたりで、かなり苦しかったらしい。

或る夜、前ぶれもなく、中村さんの訪問を受けた。日本刀一ふりを持参され、「これで六万円貸してほしい」と頭を下げられた。どうしても、明日、月謝等を払わねばならぬとの事であつた。私自身が用立てて差しあげられぬので、質屋に案内した。日本帝国海軍主計中佐は質屋が初めてらしく、歩きながら「申訳ない」を繰返えされる。私はかえって恐縮して、簡単に貸してあげられない自分が恥

かしかった。さて、質屋に見せると、刀では、ぎりぎり四万円だと言う。私は大いに責任を感じ弁じたのであるが、それ以上は絶対無理だと言う。中村さんも、いつになく、刀の由来を力説された上、「四万円では用が足りぬ」と事情を説明する。質屋のおやじと息子は首をかしげるばかりで埒があかぬ。私はじれったくなり、「どうだ親父、いつもの背広三着持って来るから、こみで六万円貸して呉れ」と提案。「それなら」という事になった。中村さんは、「それでは余りにも迷惑を掛けるから止して下さい」と押問答になったが、結局は、質屋の息子のオートバイの尻にのって、私の背広三着を取りに、夜の巷を走った。

後年、お子さんの内二人は官立の医大、一人は教育大に進学した。中村さんは、毎年私の年賀状の絵と俳句を楽しみにして下さって、必ずその批評を書いた便りを下さり、私も張合いがあった。然し最後の子供さんが医大を卒業した年の五月、鯉幟の流れる日に胃癌で他界された。恐らく、子供三人が、目的の大学を卒業するのを見て、どけて、ほっとされたのであろう。立派な医師二人と、一人の教育者が誕生し、活躍されて居られるであろうと思うにつけ、あの夜の出来事が蘇るのである。

確かにあの夜だ。六万円をポケットにした中村さんが、西荻窪の「こけし屋」でコーヒーを御馳走して呉れた時、泌々と言われた。「秋山さん、貴方は質屋を、自在に手玉にとっておられますなあ」。私はこの言葉の善意に、少なからず参った。質屋を手玉にとって、私は金利を払っている。

中村さんは、私の女房の為に、食べ切れぬ程のケーキを、土産に包ませたのである。

鯉幟風を孕みし別れかな

以来、私は、自分の絵の遊印として「不随世碌」の陶印を押し、

気取っている。本当は、楽に世の碌に随いたいのかも知れないのだが、自分の事なので判らぬ。

まだまだ質屋に関する滑稽実録譚は、湧くが如くあるのだが、恥を晒すのも、ほどほどが好いと、やっと今、気が付き始める程、質屋の話には酔えるのである。

さあ、どうでしょう。全国質屋連合理事諸郷、あまたの質屋にひたすら奉仕した、私の弛まざる積年の努力に対し、勲章を頂けませんでしょうか。決してその勲章を質草にして流す様な失礼は致しませんから。

真四角に質札たたみ春逝けり



不
立
跡



悠 生

心 心

父の最後



母が死んで、寡夫となった父を、わざわざ山梨の昇仙峡の山中から東京に呼び戻した私が、肺に穴があいたからとはいえ、年老いた父に、又、独りで生活して呉れとは、中々切り出せなかった。

文化国家である日本には、結核予防法とかいう掟があつて「金はいらぬから入院せよ」と、保健所職員の、有難くも厳しい催促を受けたが、「こちらには、女房子供と親父がいて、そっちの都合ばかりにはなれねえんだ。」と、ふらふらの体で頑張っていた。

そんな時、鳥取県庁に奉職していた姉の連れ合いから、「日本海に面する山陰の温泉場・浜村で、唯一の町医者が亡くなり、診療所が空になって、医者を探している。」と、連絡して来たのである。医者である父は、私の病状を憂慮しながらも、私が精一杯で工面した幾ばくかの金を往診靴に入れて、単身、東京を離れた。

ひぐらしのそのひぐらしのくれがけの

一方、商売上で、一度は諦めていた古い貸金を、当方の事情を説明し、月々返済してもらう話がつき、其れを生活費に当てる事で女房子供を実家に帰し、私が、武蔵野日赤病院に入院したのは、昭和二十八年の晩夏であつた。

蜘蛛の巣の自画像さかさに立掛ける

蝸の中に間借りの部屋を捨つ

終戦直後、大陸からの引揚者の殆んどがそうであった様に、私も、手を拱いていては、口を糊す事の出来ぬ状況で、朝から晩まで理屈抜きに金を追いかける毎日であった。厭になるほど貧乏もしたし、金と智恵は俺に任せろと自惚れる位金が出来た事もあったが、所詮は根無し草の所業で、ここ一番の投機も、朝鮮戦争の煽りで失敗した揚句、肺に密柑大の穴があいていたという次第であるから、手術三回を含む一年十ヶ月の入院療養生活は、観念して、いろいろに耐えた。唯、二度目の手術以後、女房子供と、入院中に縁を断った事で、異常な程の孤独感に襲われ、それを脱却する迄、夜は転々反側した。

医療保護熟柿を赤く喰みゐたり

錢少し布団の下に敷きて病む

すべて人の助けにて生き寒夕焼

そのような時、三十二人が一部屋で臥ている病室に、見舞の父が、突然尋ねて来たのである。私は、その父に、大変元気を装った。土産の風呂敷の結び目が固く、解こうとしてその包は、私のベッドの上で何度も横に転がった。秋の夕暮、病院の庭で、二人きりになった父は、「何も心配するな」と言った。

萩に向ききりたつ父の喉仏

鳥取浜村に帰った父から、封書が届いた。「君は、退院しても、一、二年は静かにせねばならぬから、山や海のある僕の許に来られよ。但し、田舎の人は、肺病を極端に怖れるから、神経衰弱の養生という名目がよろしかるふ」という文意であった。私は、涙が出る程有難かったが、面倒を見る立場の自分が、父の世話になるばかりか、その生計を脅かす様な事は、死んでも出来ぬと思った。

春愁や昨日と同じ事をして

昭和三十年五月中旬、三度目の開胸手術をした結果「結核は治癒している。残存空洞ありと診断したのは、レントゲンの見間違いであった。抜糸が終れば、何時退院しても好い」と担当医に言われた。私は、仰向けのまま筆をとり、父にその旨の報告を端書に認め、追伸に、自活する目処があるので、そちらには行かぬ、と簡単に書き添えた。

水槽の西日鈍角に壁揺らぐ

強い驟雨の中を退院し、久し振りに娑婆の興奮に浸っていた六月三日の深夜、「父死す」の電報が、病院から転送されて来た。やつと何かに辿りついた途端、又々奈落に突き落とされた状態である。抜糸を終えたばかりの、生々しい大痕を背負っている私にとって、汽車の長旅は到底不可能であり、それが無性に腹立たしく、同時に、私が退院したその日の父の死は、単なる偶然ではなく、父は、自分の命を、私に呉れたのに違いない、と頻りに思い、明易の白みの中で、果然と壁にもたれて、やりきれなくなっていた。

短夜の窓に電柱ぬつとある

骨壺を抱えて帰京した弟がもたらした父の遺品の中から、私は、聴診器だけを貰った。それは、三つの象牙の部分を、黒いゴム管で繋いだ旧式のもので、長年父の往診鞆に入っていた為、いくらゴム管の弾力が失せており、象牙の部分は飴色に変色していた。

行く秋の一人となりてあるきけり

昭和五十六年六月三日、東京港区赤坂台町の、旗本ばかりの菩提寺である専福寺に於て、父の二十七回忌の法要をした。鳥取の姉も当日の為上京し、私の家に泊った夜の事である。姉は、父の最後の状況を詳しく聞かせて呉れた。私は此の事実に、驚愕し、心が激しくおののいたのである。何故、二十何年間も、此の肝心な事を知らずにいたのか。又、何故姉が、此の話を其れ迄しなかったのか、今もって不思議でならないのである。その話によると、父は、死ぬ当日の夕刻六時半頃、手紙を投函しに出て、それを村の人が目撃している。其の二時間後、別の村人が、注射をしてもらう為、診療所を訪れると、診察室は煌々と灯っており、「先生、先生」と声をかけ、返事がないので這入って行くと、灯の消えた薬剤室の板の間に、父が突っ伏して寝ており、揺り起す可く手を触れると、父は既に事切れていた。上を向かせると、眉間の裂傷から血が流れたと言う。村にとって唯一人の医師である父の変死に、駐在をはじめ村民はおろおろして、鳥取の姉に電話で急変を知らせたらしい。真夜中に到着した姉夫婦の観察に依ると、診察室の机上には、健康保険の請求書類が拉げてあり、廻転椅子は反転して、後方の薬剤室に向いていた相だ。推則すれば、脳内出血の異常兆候を感じた父は、自らに薬を投与すべく、朦朧とあるき、薬剤の台に額をぶつけて倒れ、意識を失ったと思われる。父は、まったく一人で死んでいたのである。

翌、六月四日。村民全員が集まって鄭重に葬儀が執り行われ、浜村と鹿野城の中間にある一番高みの小山の頂上に、人の背丈の倍程

の高さに丸太が井桁に積み上げられた。日没直前、父は戸板に寝かされ、天を仰いだ姿勢で、その組み上げた丸太の上に、戸板ごと乗せられた。義兄と姉は、素足に藁草履で現場に連れて行かれ、読経の後、村の長らしい人から、「これに火を放ち、点火したら直ちに草履を脱ぎ捨て、裸足となって山を下りられよ。決して後を振り向かぬよう。」と重々しく言い渡され、二人は、ぶるぶると体を打ち震わせながら点火し、焰の音を背にして、素足となり、一散に山を下った。そして姉は、診療所の父の布団で、朝まで泣いていたという。父は、山頂の丸太の上で、目鼻を夜の天に向け、潮騒と松籟と、千変万化にちぎれる焰の中に身を横たえ、夜明けまでかかって灰塵と化したのであろう。

以上は私にとって、胸の裂ける様な父の死にぎまであるが、あまりにも壮烈な最後を憶うにつけ、父の命を貰った私は、うかうかと生きられぬぞ、と、密かに心を固めるのである。

生前の父は、

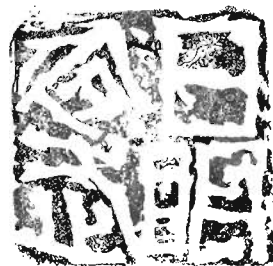
「男は、小さな声で話をするな。」

「男は、道の真ん中を歩け。」

「男は、よしんば曲ったとしても、曲ったなりに確かな男であれ。」

と、私に言い続けた。然し、不肖の子である私は、「大声で話す可し」の精神だけは、やや遵守しているが、次項、大道の真ん中を行く可き筈が、何時の間にか、横道に外れ、果ては、裏街道を歩いている始末であり、又、「曲ったなりに確かな男であれ」の項は、言い付け通り、将に立派に曲っているのだが、「確かな男であれ」の肝心な部分が誠に曖昧であり、父に、何とも申訳なく、慚愧に耐えぬまま、今日に到っているのである。

重陽や父からは濃き眉もらふ



白明
之印

飯に係わること



私は、三百六十五日、一日に三度の割合いで、五十八年間も飯を喰い、命を保って来たにも拘らず、或る時期迄、飯を喰う事などは、呼吸をするのと同じで、至極当然の事と思い、量が足りるとか足りないとか、旨いとか不味いとかだけで片付けて来た様に思える。

曾て、日本全体に、喰い物が欠乏したり、自分の体調が悪かったり、その時々で飯の喰えない事もあったが、腹が減ると、米の飯さえあれば、どんなお菜でも、大して不満はなかったから、肉は何処でなくては駄目だとか、喰い物にいちいち能書をいう男はつまらんと思っていた。だが四十を過ぎた頃、人間の生きる基本は、寝る事と、喰う事だと自覚し、この二つは、疎かにしてはならぬと思ひ始めた。かと云って、豪勢なものを望んだ訳ではない。寝具は、その時季の、自分に適うものを吟味し、又、食器は、生涯の伴侶たる可き納得の出来る物を身辺に置くことに留意した。十七年程前、瀬戸黒、糸切り高台の、天目茶碗を入手した。女房は、「こんな黒い物で御飯を食べるなんて」と不満を漏らしたが、私は「此の天目茶碗こそ、本来飯を盛る器である。必ず三度の飯をこれで喰って、野武士の様な茶碗にして見せる」と、女房と自分に言い聞かせて以来、今日迄の歲月、この天目は、毎日朝夕の飯を盛られ、どっしりと黒光りしている。幾年か前、此の天目茶碗の景色を見た骨董屋が、「何とか譲ってもらえぬか」と言い、女房は「飛んでもない」と即座に

拒絶した処を見ると、すでに此の天目は、手塩にかけた女房の分身となっており、私よりも執着している様に思える。又、茄子胡瓜の漬物とはいえ、明の白磁に盛り、素麺であっても、江戸初期の伊万里赤絵鉢に、氷と共に浮かせて喰うと、王侯の気分がするのである。斯の如く、物を喰うには、その器が大いに楽しませて呉れるが、それにも増して、季感を味わう事こそ日本の食事ではなからうか。尤も、私の好物である「おから」や「鹿尾菜」の類では、食事などと大それた事は言えぬが、譬えその季節の旬の物でなくとも、茶碗に盛られた白い飯の光りにさえ、四季の微妙な違いが感じられるのである。此の微妙を、適確に言い止め得たならば、素晴らしい句になると思うのだが、なかなか叶わない。

笹鳴や一碗の飯真つ白し

私の感覚では、飯の白さは、春隣りか早春が一番と思うが如何かなものか。

朝の飯にわかにか秋となりけり

卓上の飯を前にして、暦の上の秋でなく、秋の強い実感があったのである。

夜遅く戻って来れば豆の飯

さしたる句ではないが、如何にも晩春の深更、豆の緑が鮮烈で、私は、自分の作品ながら、此の句が好きだ。友人に言わせると、豆の飯は、私が感激する程うまい物ではないらしいが、子供の頃、豌豆を莢から出す母の手伝いをし、その日の夕食の豆飯が矢鱈に旨かった。以来、今もって、豆の飯は旨い物と決めている。味覚の判定は、一度思い込むと、頭の中に固定してしまうのかも知れぬ。だからこそ、各々の家には、家風にも似て固有の味が引継がれていくのだろう。

二十幾年前、入院療養中の食事は、周期的に同じ物が出て、「又こ

れか」と、げんなりしたものだ。就中、朝の冷めた味噌汁に這入っている蕪は、嫌々食べていた。或る日、丹前に懷手をした療友が、ぼそりと言った。「此の病院の飯で旨いのは、蕪の味噌汁だけだ。」私は、心中、啞然として、「此奴、ふざけているんじゃないか」と思ったが、どうも真面目らしいので、撫然とした。その日の安静時間、ベッドの上で、蕪のことばかり考えていた。その頃の私は、煮付けた大根を「旨い、旨い」と食う奴を見ると、「こいつ、俺よりも大人なんじゃないか」と密かに思う事があった。それは、忖度するに、両親が、風呂吹大根を、如何にも美味しそうに食べていた事に起因する。子供の頃、出された物を残すと叱られるので、嫌なものでも目をつむってむしゃむしゃと喰ったが、太切り大根の煮たのぐらい、下らない食い物はなかったのである。が、而立ともなった私の意識下に、親父とお袋の好んだ大根の煮付がいける様にならなくては、俺の味覚も未だ餓鬼並みなのではないかと云う劣等感が微かにあった時だけに、大根の親戚筋である蕪の味は、一考を要する問題であり、「ひよっとすると、じっくり味わえば、蕪や大根が旨いと思う年齢に俺もなっているのではないか」と思い至った。それから、蕪の味噌汁が一日も早く運ばれるのを期待して、毎日素早く碗の中を覗き込んでいた或る日、汁の表面に、白々と丸い部分を少し見せ、待望の蕪が浮いていたのである。私は、自分自身に嘘をつかぬ様、正直に正直に蕪を噛みしめた。「旨い、確かに旨い、正しく大人の味だ。」私の味覚は、その日を以て成人したのである。その気になると言う事は恐ろしいものだ。今では、風呂吹大根が、最高の部類の喰い物だと思ふ程になっている。

灯の泌みるほどに風呂吹大根かな

昭和二十年後半、絹物輸出の最盛期に、織物工場に行った事がある。昼時、講堂の様な広い食堂で、大勢の女工ばかりが、同じ色の

作業服で、同じ物を一斉に食う音を伴った情景は、異様であった。その頃は、冷房装置が無く、夏の窓は全開で、遠雷が届いた。

日雷女工千人飯を喰ふ

最近、老人会の温泉旅行に同行した事がある。大型バスを何台も連ねて繰り出し、枯れ切った風景の中を突走るアスファルトの大型対向車も、老人を満載していた。昼間の或る時間帯は、幾万という老人が、往路復路を、前を向いて疾走しているのである。温泉宿の夜の大広間、画一の膳に肩を接する如く並び、正面舞台のマイクを奪い合っていた。

丹前の同じ百人飯を喰ふ

吟行で武州御岳の駒鳥山荘に泊った事がある。同道した女房は、別の目的を持っていた。古くなったあちらこちらの神社や寺の護符御守りを、御岳神社に納めるべく持参したのである。所が、当日は大雨で、神社に参拝はしたものの、大周章で山荘に駆け込む始末であった。次の日は、打って変った晴天で、夏暁の、切れ込んだ峡の中を縦横自在に飛ぶ鳥を足下に俯瞰出来、如何にも高い山深くいる自分を感じた。昼から、幾人かで尾根を伝って散策した時の事である。女房が、雨騒ぎでお札を納めてないのに気付く、此処で燃やそうと言い出した。山頂の靈気を感じたのであろう。私も躊躇なく合点し、同行の人達から幾分遅れた所で、お札類を積み、火をつけた。所が、どういう仕儀か判らぬが、突如として強い風が捲き起こり、火の粉が飛び散り、手の付けられぬ状態になった。「山火事になる」と仰天、女房の眼も引つっている。私は、徒手空拳、咄嗟に小便で鎮火せんと、股間に手をやると、「貴方、何をするんですか、お

札ですよ」と、えらい剣幕で女房に叱られ、二度吃驚して、頭が混乱した。その瞬間、護符御札は燃えつき、真っ白い灰となって四散消滅した。ほっとすると、一望の御岳山塊は、直射日光の中に静まり、今迄の狼狽が嘘のようで、流石に護符の靈験は灼かだなあと、変な所に感服していると、落ち付きをとり戻した女房に、又、改めて怒られた。駒鳥山荘の飯の句の枕が、とんだ話になって恐縮である。

青簾日のある内の夕餉かな

此处で改めて考えたい。数多の俳人は、口を開けば一樣に、類型のない、新しい作句を目指すと言う。その様な事は当り前のことで、口にするほうがおかしい。詠う素材が突飛だったり、漢語辞典でも探さなくては判らない語彙で表現しても、所詮はむなし事である。最も身近かな飯の、移りゆく四季の微妙をすら詠い遂せた俳人が、今迄に一人でも居たであろうか。

俳句は、万人が見て承知しているもの、又、万人が普遍的に感じていることを、その作者の独自の魂で、その本質を見詰め、鋭く摑えたものを、素朴、且つ動かぬ言葉を布置して、香り高い表現をする可きであると思う。

笹鳴やまず盛られたる父の飯

さて、斯くも飯に係わった私は、次の如き切なる感懷をもっている。

「人間の最もかなしい営みは、飯を喰うことである」

形に係わること

齢をとると、段々物が観えて来ると言う話なので、私はまだ齢をとり足らぬのかと思っていた。然し、最近になって、幾らか物が見えたかと思える様な節がある。両眼は、大分以前から眼鏡に頼っているので、目が悪くなってから物が見えて来るというのも少々おかしいのだが、眼底の映像に、今迄見えていた以外の何物かを感じるのである。

蛸螂が青々と死んでいた。少しく翅を拡げ、六本の脚を交叉しあい、鎌の関節の一つは伸びている。細い胴が、長々としている割に、頭部の極端に小さいかまきりは、眼の玉まで緑色であった。此の様な体形の奇怪さだけでも、充分気味が悪い要素であるのに、まして、ぎざぎざの付いた鎌を振り上げられては、居たたまれぬ思いがする。死んで動かぬ蛸螂を、つくづく見ている内に、不思議なほどの機能美を持っていることに気付かされた。奇妙に長い首と胴を支えている脚と言ひ、又その細い脚が秘めている強靱なものに、此れ以上のバランスは無いと思われる程の安定感があるのである。

自然界の中で、異様な形態に見えるものが、実は、そのものの生存にとって、寸分の妥協のない形であることに驚かされる。毛虫に於てすら然りである。

全身に毛虫は雨を残しけり



草木の朽ちてゆく姿は、日々に弱ってゆく力のバランスを保ちながら崩れてゆくのであって、枯れに応わしい形への移行を始めるのである。

枯れ深き木賊の形崩さざる

人間も自然の摂理に違わず、体力が衰えると、それに従って各個所の形を変えてゆく。例えば腰が曲る。それは、その老人の全体のバランスが、腰を曲げる事に依って保たれるのであって、不必要に曲ってはいないのである。老人には老人の、衰えてゆく肉体と魂に合致した絶対ともいえる形が、いつの間にか出来てゆく。これこそ、亡びへの調和の姿ではないか。

仮に、年齢的に腰の曲った老人が、子供の様な声帯で喋り、筋肉隆々としていたとすれば、不様である。

白髪は染めるに及ばぬ、禿は、堂々と禿げておればよろしい。

順調に老化し候西行忌

吾々は、宇宙遊泳でもせぬ限り、常に何等かの形と色彩の繁雑な中で生棲している。従って、物の形を排除する事は、或る種の雰囲気の間を作るのである。

一物ものせぬ机の淑気かな

露の玉が結んだ。物理的には、表面張力ぎりぎりの所産である。小さいながら地球の引力、大気の密度を加味して、これ以上の完全な形は無いと思う程神々しい迄の姿を現出している。

白露の中の一つを打ち毀す

人為的な建造物の、凹凸ばかりの都会生活は、思わぬ所で自然の形に遭遇し、ぎよっとする事がある。

東京に丸すぎる月出でにけり

草木、虫魚、獸、石、土、水、山川、虹、雲、果ては人間を含む自然界のすべては、それぞれの確固たる形を保っている。これではたまらぬと、息抜きをしたのか野獸派のデフォルメ。然し、このデフォルメですら一種のバランスに繋がっているのだ。

何冀と頑張った岡本太郎は、坐る部分に太い棘を立て、坐ることを拒否する椅子の形を造り、どうだ氣持悪いか。と威張っている。

永き日や形崩れし鶴を描く

東洋人の大半は、碗か椀で飯を喰い、汁を飲む。碗の形は、瓜を二つに割って、中実を抜いた形である。酒の容器であった瓢箪の尻の部分を切ったものと思えば好い。明らかに農耕民族が何世紀も引継いできた形である。

西洋人が水や酒を飲むコップは縦長である。これは、獸の角の形が変化したもので、狩獵、遊牧民族の名残りである。捕獲した野牛等から切り取った角の空洞に、流動物を吸んで飲んだのであろう。角は先が尖がっているのに、土に穴を堀り、その穴に刺して使用した。その様な期間が長かったので、土で容器が作れる様になっても、相変らず角の形をした器を作ったらしい。子供の時から用いている

先のすぼんだ形でないと、水や酒を飲んだ気にならなかったのである。底を平らにして、現在のコップの形になるのには相当な日時を要した。その事実は容易に推測出来るのである。吾々は硝子のコップで味噌汁を飲んで旨いだろうか。又、お椀でコーヒーが飲めるであろうか。勿論、飲めるには飲めるのだが、違和感があり、何とも腑に落ちぬ味がするのではなからうか。二千年もコップで味噌汁を飲み、お椀でコーヒーを飲み続けていたら、当然、反対の現象が起るのだが。この喩えは、如何に物の形が既成観念として込み込んでおり、吾々の感覚を左右するかの査証である。

既成観念は、伝統とか風俗に関連し、実生活の上では、大変重要な役割りを果すが、創作に係わる者にとって、この既成観念に侵された感覚は大きな問題を含んでいると思う。

譬えば、悲しみの感情を表現するのに、すぐ、時雨とか虎落笛とか、虫の音に結びつける安易さは、既成観念ゆえの発想である。親が死んで悲しんでいると、冬の雨が降っていましたでは、悲しいには違いないが、これでもか、と言う事になり、詩の機微にはほど遠い。悲しみに明けた朝、幾条もの鯉のぼりが風を孕んでいたか、花菖蒲が紫の色を吹き上げている方が、そのかなしみは鮮烈である。

大柄の浴衣着て母死せりけり

私が三十二、三の頃である。戦後の混乱期に、何度も修羅場を潜った揚句結核となり、二年近くの手術療養から解放された直後、ある事件に否応なく巻込まれてしまった。表面、右翼結社を標榜しているが、暴力団と大差のない集団と話を付けねばならぬ事が持ち上ったのである。掛け合う相手は、殺人の前科もある牛の様な男で、常に屈強な側近を従えており、事と次第では、手術で少なくなった残りのあばら骨を折られる危険もあり、覚悟を決めて相手の事務所のビルを登った。

一匹狼で通っていた私は、当時痩せており、眼ん玉ばかりぎよろつとしていたが、格別度胸があったわけでもない。唯、土壇場になると、どうとでもなれと開き直る持前の図太さがあり、目を合わせた瞬間の気魄の勝負を本能的に身につけていたらしい。

眼を据えた話は、すぐ決着した。その日以後、相手の陣営で麻雀をする間柄となった。

私は、何をするか見当のつかぬちんぴらは敬遠するが、やくぎの幹部は好きである。一見恐ろしそうであるが、付合ってみると一様に淋しがり屋で、自分の足らぬ所は突っ張って瘦我慢をする人の好きがあり、こちらが姿勢を正しておれば、素人よりよっぽどさっぱりして話がわかるのである。

当の親分の麻雀は、面構えとは裏腹に小心翼翼とした思い切りの悪いもので、「やくざもんの金を取って行くんだから凄いやな、」と言っては金を投げて寄こす始末であった。そんな晩、「始めて秋山さんに会った時、殺し屋かと思ったよ。」とまじめに述懐されたのである。

男の渡世では、その場その場の臨機応変の姿、形が相手に与える影響が大きい。然し、これは、外形的な図体の大小や、着る物の好悪ではなく、内面に存する心が形に滲み出るからで、大人物の前に坐っただけで威圧されるのは、その人物の魂に圧倒されるのである。いみじくも尾崎士郎は人生劇場と云った。故意か自然かを問わず、この浮世の言動のすべての形が、演技なのかも知れぬ。

それにしても、プロのやくざに殺し屋と間違われたとは、私の魂も形も高が知れているというものである。

明月や御覧のごとく老いにけり

赤踏三百句



寒紅の無残に老を深めけり

敗戦や新兵けろりと炎天に

熱風や聲を断ちたる大軍団

山陰や枯野に舟を歩ゆましめ

山陰や又時雨来て海濡らす

河骨に月光の降りとどまれり

一定の顔して黒鯛往来す

大かまきり風のかたちにあるにけり

闘鶏の鶏を跨いで人叫ぶ

暁の花びら落とす大桜

陶枕を文鎮として大書せり

本買ひに出てふくらます初袷

女湯に女這入りし夕立あと

山霧の動くにも道ありにけり

裸の大將死んで花火のあがりけり

中年や黒き電話を蚊帳に入れ

雷鳥や東西南北ありにけり

蟬の殻爪の先まで抜きにけり

朝涼の材木おろすソ連船

時雨るるや女手に手に紙袋

月明の群牛首を上下せり

冬为天遠くで鳩は光りけり

寒夕焼富士に力を残しけり

桃の枝折りつ思へり壺の丈

かくれ里大内裏雛打ち坐り

前向きに山女は少し流さるる

山女みな頭を山に向けいたり

春の駅片側ばかり人多し

一と冬中見て来し櫓蹴ってみる

胡坐まだ寒き机のあたりかな

仰のけに馬は背を擦る麦の秋

さもあらばあれ大風の花盛り

篝火の下から見たる大桜

薰風や丹念に焼く卵焼

鹿の子の黄塵少し立てにけり

堀に鼻つけてのぞけり夕牡丹

青嵐親から最後の金もらふ

何しても一人はむなし豆の飯

度外れに暑き大仏在しけり

首いつもかしぐ彌勒の暑さかな

雪止みぬ子のこめかみに血は透けて

行く秋の袖より仁丹の粒ひろふ

死ねば善人といふ木蓮馬鹿でかい

懸垂の首鉄棒に夏の雲

影のない曇天の巷仏生会

初夏の電車にわざと乗り遅れ

月蝕の夜の声もたぬ兜蟲

野分や娼婦真つ暗闇で梨齧る

月光をさかのぼるごと僧立てり

鳥渡る夜の鮮人は犬喰らふべく

原爆忌静かに老舗倒産す

霜の声善人はもふ沢山だ

誘蛾燈幼く兆すデカダンス

その女羅うすく着てゐたり

大兵の浴衣懷に何もかも

裏窓や裸の女背ばかり見せ

寒卵置けばごろりと動きけり

元日毎に庭の大木伐るといふ

元日のとどのつまりの茶を濃くす

鳴雪忌器用に貧乏いたしをり

青嵐唐墨粘りだしにけり

桐の花明るき雨となりにけり

ゆつくりと後姿の蚊となれり

大揺れに蓑虫の天ありにけり

就中野分は月を吹きいたり

観音の門外す鴉の声

火の音に調ありけり漱石忌

しこしこと冬夜の海月喰みいたり

暖冬や芋銭のかっぱ立ちあがり

春隣放庵の牛話し出す

元日や鐵齋の虎あばれをり

啓蟄や片目の志功無尽蔵

暁の暗く明るき二月かな

孕み鹿いちいち土を見てあるく

桃の花犬は目玉を土に置く

すててこで泊る氣の酒呑みだせり

冷奴今日もまた叔母泊まるらし

夏の汐よりも赤子の匂ひけり

曇天の雨誘ひをり大牡丹

まばたきのほかは動かず臺交む

荒つぽく可愛がわれし兜虫

台風の曇りを見せし漆椀

鬼芒そのまま枯れて見せにけり

鉤豆の胴ゆるき影もちにけり

寒鰯に真水の光浴びせけり

暖房や人に見られつ猫の尿

こめかみに力のはいる冬の月

寄せ鍋にだしぬけの客加はりぬ

渦巻のあるだけ凹む冬の海

見も知らぬ人の焚火に近よりぬ

分際を知りたる年を迎へけり

芽吹く枝上へ上へと分かれけり

天明のほどきし処桃の花

流水や見へる限りの河動く

流水や眉間の狭き族の長

朝寝許しあふ天皇誕生日

金魚売こまごまと水捌きをり

対岸の石山に人陽炎へり

風鈴の音も包装してしまふ

滝の裏まったく乾きいたりけり

真夜中の入道雲を明りとす

新涼の着物をゆるく着ていたり

秋の風一列の家建ちにけり

言ふなりの母となりたる菊の晴

秋の夜の目薬鼻をつたひけり

秋の夜の中見せて発つ食堂車

菊花展氣俣な菊はなかりけり

菊花展菊の遠くで休みけり

夜よりも暗き時雨の机かな

冬深し鳴かぬ鴉が屋根を越す

凍鶴のまったく音のなかりけり

凍鶴に夕闇のすぐとどきけり

雪原の降る雪に鶴加わりゆく

ばらばらの凍鶴なれど群棲す

叮寧に凍鶴脚を畳みけり

凍鶴に気付かれぬ眼で見えていたり

啓蟄や一つの屋根に二た世帯

馬の目の前へ前へと猫柳

恋の猫ちよつと戻って消へにけり

何糞とたまには思ふ春炬燵

棒鱈のかならず縦にちぎれけり

そのままに生家はありぬ桃の花

寒鮎の小出しの力釣りにけり

帰る家在るはかなしき春の暮

春蘭の地べたに近く花もてり

逝く春や久しく開けぬインク瓶

熊ん蜂本気になって巣を作る

不作法になりたき夜の初袷

なまくらに生きてしまひし桜桃忌

清水飲む首を石より低くする

夕蟬や宿の廊下の大鏡

蚊柱の中にはぶつかるものあらむ

山中に小さき灯あり冬近し

秋深し寝入りし妻がまた動く

紙漉の踏み固めたる水の前

紙漉場開けっぱなしの出入口

強霜や飼ひ犬同士吠えあへり

冬の山百米の水落とす

極月や鮫の顔して家にゐる

極月を切り抜ける技かなしめり

黍畑風の果まで撓ひけり

震災忌青空のまま夜となる

秋晴や他家の二階に眼がありぬ

朝寒やいくらか水が重くなる

吾一人気付きし流れ星なりき

八つ頭立派な土をつけてをり

冬の滝動かぬ水を近くにす

出没の鳩の弾力ありにけり

一角に残照絞る鳩

むぐつちよのくるつと出でし水明り

一ち時に街燈点きし寒さかな

灯を消してより蕪村忌の心かな

日表となる元日の机かな

ひっそりと暑く字源をめくりをり

新涼の隣に米屋来てをりぬ

新涼の他所者として木場にをり

水中の見へたる二百十日かな

秋深し背中合はせに駅の椅子

川見ればすぐ石投げる花野かな

秋の川に足入れて別人となる

強き雨牡丹を目指し降りにけり

寒鯉の咄嗟に走しり何もなし

人の歩にあわす羅着てゐたり

七夕や深夜の窓を開け放ち

日輪の中だけ見えぬ燕

一本の抜毛も暑くなりにつけり

夏の夜の眼鏡をかけし角力とり

サーカスの昼の女や青嵐

手足見せ一家全員昼寝せり

二ヶ処より声あげて野火放ちけり

蚊柱の歪むと見へて移りけり

蟻蠓の正体もなく当たりけり

日が暮れる際に元気な水馬

河鹿鳴く夜をさつさと寝てしまふ

中年の廁の汗をかみしめる

耳開けて青葉の中を通りけり

夏立つや表面張力際立てり

暮昼夜に見参いたしけり

日の光絞りきつたる花辛夷

桃の花大甕に声入れてみる

引鶴の高々と群れ光りゆく

花吹雪団体で口磨きをり

夏近き硯に水のもりあがる

そつぽ向く黒猫とゐる青簾

深秋の本屋で妻と離れてをり

火の中の枯菊青き焰あぐ

十二月地下から地下を抜けてゆく

煮凝の中にうつすら灯が点る

降る雪のときたま力ゆるめけり

角巻のいづれも一重目蓋かな

三ヶ日頭ふくれて終りけり

湯婆や死後の吾が句を思へりき

春隣高き硝子を拭いてをり

春昼やどしんと米を置いてゆく

観音に心を展く桃の花

投錨の音にも秋の深みけり

垂直に骨となりたる曼珠沙華

前を行く人いなくなる時雨かな

長き夜の眉間でものを言ひにけり

満月に向きたる耳を並べけり

秋光のゆきわたる琴弾じけり

生きた根が出る枯山を切り崩す

初夏の風の机となりてゐし

雨の中噴水の水見えてをり

駒鳥や足下を雨が落ちてゆく

滴りや全山の杉直立す

滴りのたしかなる間を保ちけり

大斜めに蜘蛛の巣作り始まれり

尻の糸信じたる蜘蛛^虫大胆に

さなきだに春の花屋となりけり

桃の花全紙に筆を下ろしけり

夏近き廊下を鳴らしあるきけり

頂の鉄塔見ゆる寒さかな

斑雪川中島の桃畑

寒明けの鍋あるだけを磨きけり

真夜中の春一番となりけり

蟹の穴とば口に日の当りをり

足全部使ひて蜘蛛は殺生す

蟹の穴同じ処に波が来る

柔い土見てをりぬ梅雨晴間

梟や月光があり月見えず

錆び釘の中より選ぶ暑さかな

何もない部屋より秋の空見ゆる

ばった飛び下りざまに顎打ちにけり

太箸や髣髴として父の所作

一方に総立ちの馬風花す

風花や何するとなき馬の群

大仏の後にまわる寒さかな

小正月ぽかっと窓が開いてをり

梅開く先生の家荒れてをり

立春の目立ちしことは何もなし

梅の花山閉ざされていたりけり

梅林や団体二つすれ違ふ

蒙古風万遍もなく日の重し

暖かや色付瓶の征露丸

宋拓の大らかな文字暖かし

四月馬鹿本当の嘘つきにけり

麗らかや迷子の特徴告げてをり

花疲れなまなまと月出でにけり

蛇穴を出て眼の中を青くせり

穴を出し蛇の頭よりも草低し

全身で逃げてゆく蛇まだ見える

蛇の背をするするよぎる蛇の胴

穴に入る蛇寸分のたるみなし

別々に夜を過ぎしゐる桜かな

雪溪に投げし礫を見とどける

石の先蜻蛉の頭ぐりぐりす

如何様に運ぶも縞の西瓜かな

深閑として蜂の巢の太りけり

神妙に常の一と間の大暑かな

真ん中の凹む朱肉の暑さかな

秋燕小さきものを落としけり

耳たぶに新米一粒白くのる

時雨るるや日本捕虜誌を再読す

蜨蝶土塊に翅立ててをり

女房の耳二つある夜長かな

木の葉髪自分に詫びること多し

秋の風黒き魚が暗くをり

柚子切ればうすき緑の種こぼす

母死せり踝あます浴衣着て

母死せり大夕焼の中にな

母逝きし安堵を秋の深みとも

紐引けば秋灯点る母へかな

亡き母の俎の疵冬に入る

ビルの前でビルに電話す夕時雨

泥棒に注意とありぬ桃の花

立春や大勢の僧庭にをり

晩年やちぎれちぎれの花明り

行く春や硝子の中に石斧あり

蠅とまる硝子のこちら側にをり

羽拔鶏囲の外のもの突つく

夏の夜や無口な人を味はひをり

夏草や世話をかけたと死んでゆく

蟻螻や日暮れの河口逆流す

ダリヤだけ勢のある家なりき

寒牡丹生きた花びら落としけり

退屈なゴリラと春を惜しみけり

打水や鏡の中の戸が開く

噴水のでっぺん光ふり落とす

悲しみに慣れるはかなし夏の果

恙なく死にたる兄や蟬の声

山頂の三角点や枯に入る

羽拔鶏大きくのめり逃げだせり

羽拔鶏最大限に首伸ばす

十二月だなあと廊下をあるきけり

降る雪の中には昇る雪ありぬ

指先のかなしく揃ふ雛かな

春の夜の明るき部屋で居眠りす

春浅き蜩は光失はず

口きかぬ一日なりし西行忌

ある時は一人の春を惜しみけり

焼栗の赤き袋や冴え返る

宿坊のすぐそこに天朴の花

花火の夜つくづく雲を見たりけり

蟬時雨十大弟子はみな立てり

ゆく水の中に冬の灯とどまれり

大晦日邪魔な男となりけり

遠くへは流れぬ雛を流しけり

春宵やも一人の吾がゐて困る

筍と申せぬほどとなりけり

三百句は、前掲の、絵に讃をした句、いろは歌留多の句を除き、三千五百句の中から、やや全ふなものを選んでもらった。

ひよっとすると、掲載せぬ句に、拙くとも、より人間らしい面白さがあるかも知れぬと思ふのだが。

あとがき

何よりも先に、此の句画集を上梓して呉れた琉美洞の若き主人、星野紀昭君の、採算を度外視した誠意と情熱に、心から感謝する。

元より、集中の作品は、私自身が楽しんで書き貯めたもので、公にする意図など毛頭無かっただけに、星野君の熱心な誘いに、負担を感じなかったわけではない。勿論、創作したものは、一人でも多くの方に見て頂きたいのだが、星野君に掛かる余りにも大きな比重に、私の作品が答えられるとは、到底思えなかったからである。幾度も辞退したが、星野君は、頑として動かない。到頭承諾させられての始末である。

案の定、校正の段階で、顔の赤らむものが多かった。だが、引返えせないとなると、開き直るしかない。拙さを威張る気になってきた。如何です、余り完成されたもの等、面白くないんじゃないでしょうか。

私の作品は、初めに俳句があるのです。次に、どんな形の絵を配置するとその句と響きあうかを考えるのです。譬えば、

原爆忌東京とところどころ雨

私は、鬚を生やし、目を釣り上げた魚の様なものが此の句と呼応すると感じたのです。飽く迄も、此の句に対する私の心象なので、その魚が、一見具象的な形をしていても、鯉か、鯰かなどと尋ねられても困るのです。(五三頁参照)

私は俳句に絵を付ける時には、決して実物の写生はしないのです。凡そ図鑑には掲載されていない形ばかりです。

此の様な仕儀が好いか悪いか判りませんが、そんな事かと思って楽しんで頂ければ、有難いのです。

又、「未踏白書」の命名は、建白書等の如く未踏作品報告書の意です。

最後に、私の唯一の恩師である百錬居平田拾穂先生、掲載句の選に尽力して呉れた井崎青天、千原望外両兄、及び、琉美洞諸兄姉の御高配を銘記し、深甚の御礼を申し上げて擲筆する次第です。

壬戌 朱夏

無門洞にて

秋 山 未 踏 識



未 踏
朱 夏

秋山未踏 略歴

大正十二年 旧満州安東に生れる

昭和十六年 新京中学校卒

昭和二十一年 拓殖大学商学部卒

昭和三十一年 俳句結社「南柯」編集同人となる
経営コンサルタントを業とす。

現住所 東京都中野区南台五丁目二七番十四号

電話・東京（〇三）三八二―八九五四―六



中国印

句画集 未踏白書

昭和五十七年八月一日 第一刷発行

定価 一一、〇〇〇円

著者 秋山未踏

発行者 星野紀昭

発行所 株式会社 琉美洞

東京都世田谷区瀬田四丁目十五―三〇

郵便番号 一五八

電話 東京(〇三)七〇七―三一七三

七〇七―一五三五

振替 〇―六六九二八

三菱銀行玉川支店 普通 4398458

印刷所 株式会社黎明美術印刷

東京都新宿区市ヶ谷左内町二十一

